

短編小説 『線路は続く』 whitecaps

###

「詰みだ」

「えーっ！？また！？」

ここはある地方都市の近郊にある家。拓志と夏日

ひろし なつひ

はその家の居間に陣取って、将棋を指していた。

今は午前中で、親は外出していて家にいない。

さつきからもう三回将棋を指しているが、三回と

も拓志が勝っていた。そして今度もまたもや拓志

が夏日の玉を詰める。詰詰んだ玉を前にして頬をふ

くられます夏日を見て、拓志は言った。

「おまえ、何度も言ってるだろ？ 終盤は駒の損

得を考えちゃだめだ。終盤はスピードが勝負。お

まえさつき俺の角なんてとつてただろ、そんなことしたら俺にここに金を打たれる。そうしたらもう必至だ。まったく、そんなようじゃ将棋部の部長になるなんておおぼらだぜ。なあ、『なつ・ちやくん』?。」

拓志は将棋盤を指さしたあと、したり顔で夏日をちやかした。

「もう、その呼び方やめてっつていつてるでしょ。僕嫌いなんだから」

夏日は頬をふくらました。しかし、夏日はすぐ明るい顔に戻ると、拓志にせがむ。

「もう一回、もう一回やろうよ!」

「やだよ。おまえ下手くそなんだもん。将棋盤、ちゃんと片付けとけよ」

拓志は将棋盤の前から立ち上がると、外に出かける準備をするために部屋に向かった。そして夏日

は居間を出る拓志を見て、また頬をふくらました。



たちばな

橘拓志はある地方都市に住むサッカーに励む高校生。夏日は弟だ（男である）。

拓志は今度東京の有名チーム傘下のジュニアチームにはいることが決まっている。地方に住んでいる拓志は、そのために上京することになっていた。しかし、拓志は上京を前にしていろいろと悩みも抱えていた。

拓志が今所属している地方のアマチュアクラブには、拓志よりもっと優秀な選手がたくさんいる。

その中でも特に注目されていた同じチームの章平は、攻めの鋭さはピカイチで、PK戦でボールを蹴れば百発百中ゴールに入るくらいだった。章平はチームの皆から将来の展望を確信されていた。だが、なぜか東京行きに榮譽に選ばれたのは拓志だった。何でも東京のチームの監督の意向らしいと聞いてはいたが、しかし拓志はそのことに納得していなかった。

（選ばれたのは自分のほんとの実力を買ってくれたからじゃない。俺のサッカーの技術はまだまだだ。なのになぜ俺が選ばれたのだろう……。俺は、俺はもつと強くならなければ）

実際チームの周りのメンバーも、拓志が選ばれたことに疑問の言葉を口にしていた。後ろ指指されてささやかれるその噂に、拓志は後ろめたかつ

た。

あと、父親にどういう態度で接すればいいのかと
言うことも拓志を悩ませていた。拓志の父親であ
たつゆきる龍雪は、拓志が小さい頃からもずっと優しい父
親だ。聞けば何でもきちんと答えてくれ、落ち込
んでいるときは励ましてくれる。そんな父親なの
だ。

ある日幼い拓志は、雨の日に傘を学校まで持って
きた龍雪との帰り道、こんなことを言ったことが
あった。

「あのさ、お父さんってさ、病気持ちなんでしょ？

……僕、時々思うんだ、病気が、お父さんを遠く
に連れて行っちゃうんじゃないかって。そう思う
と、すごく怖い——怖いんだ。」

二人は小雨降る道を歩いている。すると、龍雪は笑った。

「なんだ？いきなりそんなこと。——大丈夫さ、この通り、父さんはびんびんしてるじゃないか」「でも……、」

「心配するな。父さんはいつでもおまえのそばにいる。どっかに行つちやつたりなんてしない。だから、安心していいんだぞ。」

その時拓志は龍雪の顔を見上げたが、龍雪が優しい表情で自分のほうを見ているのを見ると「……うん！」と笑って大きく頷いた。

小学生の拓志は、ずっとそんな龍雪が好きだった。

しかしそんな思い出も今は昔で、中学と言う微妙

な年代に入ってから、拓志は龍雪と言葉を交わすこともなくなつた。そして今、高校生になりサッカーのことで悩みに悩んでいた拓志には、そんな父親が「ウソのよう」に優しい父親に思えてきていたのだ。あまりにも優しく、拓志はその真意をはかりかねていた。言葉だけは達人なもの、その龍雪は病気をしてからほとんど失業状態だったので、龍雪のその言葉には説得力もなかった。

また、やはり一人で東京でやっていくことへの不安もある。東京のチームはジュニアチームであるつわものとはいえ、全国からの強者を集めたチームだ。自分はその中でやっていけるのだろうか。例え、そのチームでうまくやれたとして、その後プロになれる可能性はあるか？

（――誰もが夢を叶えられるわけじゃない。挫折する奴だっている。）

自分もその中にはいることを、拓志は恐れていた。

そして、家族と離れてくらすということは、何かあつたときすぐに助けってくれる人がいないということだ。頼れるのは自分だけになる。家族は皆拓志の東京行きを祝福してくれていたが、心の底では拓志は家族と別れるのが寂しかった――。



ある日、橘家の家族四人は夕食を囲んでいた。夕食はカレーと野菜サラダだ。夏日が箸の先で宙をえがきながら、龍雪と話している。

「今日さ、給食食べてる時、クラスの友達が変な顔してみんなを笑わせてて、僕も笑って牛乳吹き出しちゃってさ。」

無言で食事をとる拓志と、いつものように二人の会話を微笑みながらROMっている母親を置いておいて、夏日と龍雪はいつものように会話を楽しんでいた。

「いるいる、いるんだよね、そういう奴。」
龍雪も相づちを打つ。

「ほんと、そうなんだよね。でさ、結局机に掛かってた雑巾とりだして拭かなきゃならなかったんだけど、でも拭き終わって食べ始めようとしたらまた笑わせてくるんだ。困っちゃったよ」

そしてしばらく話した後、夏日は気づいたように思い出すと、それまで動かしていた箸を止めて龍

雪にあることを聞いた。

「ねえ、お父さん、お母さんは高校生の時何やってたの？ 今日お母さんの高校の友達って言う人が遊びに来たんだけど、『ミチル良かったわよ』、って言ってきた、なんか演劇とか何とか言ってたけど、おかあさんに聞いても何も教えてくれないんだもん。あと、おかあさんが昔東京にいたってほんと？——こつちも全然答えてくれないんだよ。」

今横でカレーを食べている夏日たちの母親の名前は、^{なつき}冴さという。おつとりした感じの、内気の穏やかな母親だ。でもいつもどこか口元に笑みをたたえていて、しかも大事なときには何かと気が利く方でもある。

その日の午前中、橘家を客が訪れた。（「ほんつと、ほんとに久しぶりね、冴！」）訪れたのはしろましろ城真城という名前の冴の学生時代の親友。彼女は今は同窓会の幹事をやっつけて、その案内のためにこの家を訪れた。二人が会うのは、二十年ぶりぐらいだろうか。

たちあおい

ちようどそのとき冴は居間の隅に飾った立葵の切り花を整えていたが、インターホンにでると、玄関に向かった。そして冴は玄関に向かう途中、その時唯一家にいた夏日に部屋にいるように聞いた。だれか昔のお客が来るといつもそうなのだ。そうして冴は玄関のドアを開いた。

真城は冴とテーブルを挟んで出されたお茶をすすると、昔のように慇懃な感じでした。べりはじめ

る。そして先方の様子を気にすることもなく、相変わらず意味のない話をどんどん進めていった。

「――ああ、だからさ、ゆりごんたらさ食事の時

カレシ

にいきなり婚約者連れ来てさ、ほんと驚いたよ。

連れてくるなんて一言も言っただけでなかつたし、あん人にカレシが出来るなんて思っただけでなかつたし。

まあ、でも良かったよ。いや、ゆりごんにいまさらカレシが出来たってのもそうだけど、その時はそのカレシって人になんだかんだ言っただけで勘定ふっかけてさ、私たちタダで食べれたんだから。ほんとおいしかったあ！特にあの店のイチゴムース！たままない！」

しかし冴の方は一言もしゃべらずに、真城の言葉にうつむきがちに笑っている

「で、そのお金浮いた分でまた食べに行こうって

話になー、……」

そこまでいって真城はようやく冴の様子に気がついた。

「……あれ、冴、どうしたの？元気がないね。体調でも悪い？」

真城は身を乗り出して冴の様子を心配する。

「い、いやそういうわけじゃないんだけど、ちよつ

と今日は朝台所掃除してたら疲れちゃって……」

冴は両手で否定すると、作り笑いをした。

「え、うつそ。ごめんね、いきなり押しかけて。

あ、ごめん。じゃ、あたしもう帰るわ」

真城がイスから立ち上がると、冴は玄関まで見送りに行つた。その時部屋にいた夏日が部屋から出てくる。冴はきまりの悪い顔をしたが、その姿を見つけた真城が夏日に呼び掛けた。

「あら、もしかして冴の息子さん、かしら？、は

じめまして」

「こんにちは。はじめまして、夏日と言います。」

夏日も笑顔で挨拶すると、

「夏日君ていうの。あら、まあ、話には聞いてたけどかわいいお子さんね。うらやましいわあ。」

真城はいきなりお姉様風の口調になるとオホホ、と口に手を当てて笑った。

「夏日、部屋にいなさいって行つたでしょ」

冴がトーンを抑えた声で夏日を咎める。すると夏日は

「……トイレだよ。」

廊下の奥のトイレに走っていった。そして真城を追い立てるように冴が家の扉を閉めようとした時（「ちよちよちよつと、待った」）、真城が外から言つた言葉が夏日の耳に入ってきた。

「『ミチル』すんごい良かったよ。あの演劇はきつとあの学校始まって以来の最高傑作だったわ。あんたの演技も最高だった。たぶんあの頃の友達みんなそう言うと思う——。」

そして今、昼間のその話を思い出して夏日は龍雪に聞いてみたのだ。夏日は何度も冴に聞いたみたものの、冴は全然話そうとしなかった。

「ああ、それはな、かあさんは昔——」

その質問を聞いた龍雪は、途中まで言いかけたが、

「ちよつと、二人とも、ご飯まだ残ってるわよ。早く食べなさい」

冴がピシヤリと言うと、

「——そういうことだ、早く食べるか」

龍雪もそう言つて、言葉を止めて箸を動かさしはじ

める。夏日は少しの間不満そうにしていたが、やはり目の前のさらに目をおろすとサラダのレタスに手をつけた。拓志はそんな夏日の様子を横目で見ていた。

そのとき拓志は別のあることを考えていた。

それは東京のチームの監督をやっている人が拓志たちのチームの練習の見学に来たときのこと。拓志はその時その監督に聞いたのだ。優秀な選手ながらもつと他にもたくさんいる、なぜ俺なんかを選んだのか、と。するとその東京のチーム監督である上村と言う人はこう答えた。

「わたしはね、君のそのサッカーに対する貪欲さを買ったんだよ。たしかに章平君はサッカーの腕

は優秀だ。しかしあの子には貪欲さがたりない。私は君にはそれがあると思った」

「貪欲さ？」

「そう。どんなスポーツをやるのにも、貪欲さが必要なんだ。もつと上に上がりたい、もつと強くなりたい、もつと速く、美しく！ それがなければ進歩はない。貪欲さがなければ、必ずどこかで止まってしまうんだよ。でも、君にはそれがある。君はもつと伸びる。だから、私は君にうちのチームに来てほしいと思ったんだ——」

（「貪欲さ」、か。）

拓志は黙々とカレーを食べる

（俺にそんなものほんとはあるのかよ。俺は、ただ下手くそなだけじゃねえか——）

拓志は一人眉をしかめた。龍雪と夏日はまた別の

話を話しはじめている。

そして拓志は思い出して、さつきから左手でテールブルの下に隠していた紙をとりだした。それは東京のチームへ入るのに必要な契約書だ。

「兄ちゃん、なにそれ。」

夏日が聞いてくる。

「親父。例の東京のチームにはいるって話だけどさ、こいつに親がサインしなきゃいけないんだ。あとでこれにサインしといてくれないか」

拓志は紙を龍雪に渡した。すると龍雪は、

「おう、わかった。サインしとく。」

すぐに快諾する。そしてこう言った、

「東京のチームに入っても頑張つて来いよ、夢は追つてこそ意味があるんだからな。おまえなら大丈夫さ。きつといい選手になれるだろう、——」

その時、その言葉を聞いた拓志のスプーンがガチャリと皿に落ちた。

「どうした？」 それを見た龍雪が不思議そうに聞く。

拓志はテーブルの上を見つめたまま少しの間無言で固まっていた。

「どうしたの？」

夏日も、冴も拓志の方を見る。すると拓志は

「かあさん、俺、メシ残すわ。あとで食べる。」

低い声でそういつてから席を立とうとした。

「おい、どうした？。体調でも悪いのか？」

それを見た龍雪も席を立って呼び止める。

「なんでもね」 拓志はリビングから出ようとした。

「おい、どうしたんだよいきなり。風邪ひいたなら風邪薬でも飲んで――」そう言っつて拓志の肩に手をかける。――その時の拓志の行動は龍雪は予想だにしていなかった。

「うつせんだよ！」

拓志はそう叫んで龍雪の腕を振り払うといきなり龍雪を右拳で思い切り殴った。

龍雪は拳を顔面に受けて後ろに突き飛ばされる。一度床に倒れた龍雪は、かろうじて呻きながら上体を起こしたものの、頬を抑えながら拓志のほうを呆然と見た。

拓志は腹の前に右手を握ったまま、テーブルの宙を睨むと、絞り出すような声で言った。

「……なんでなんだよ。何でおまえはそんな言葉を言えんだよ。」

そしてキツと龍雪の方を見ると、龍雪の胸ぐらを掴んで引き起こし、息を荒げて言い立てた。

「おまえは俺の親父だろ！少しは『おまえは夢を見ているだけだ、おまえの夢なんて叶いつこない』とか、『現実はずう甘くないぞ』とか親らしい言葉を言ったらどうだ！　なんで、何でおまえはそんなに優しいんだよ。いつも優しくて、心の中で何を考えているのかわからない。俺が東京に行ったら、——もう会えないんだぞ。俺のことが心配なら、俺の将来が心配なら、少しは俺を止めようとしたらどうだ！」

「兄ちゃん！」　夏日が叫ぶ。

しかし拓志は振り切るようにリビングを出ると部

屋に行き、ドアに鍵をかけた。龍雪はただ呆然とリビングの床に後ろ腕をついていた。



——数日後、拓志はサッカークラブにいた。練習を終え、ちょうどロッカーに向かつて着替えをしている。その日は一人で少し長めに練習したので、他のチームメイトは皆着替え終わってしまった。着替え室には今は拓志一人だった。

拓志がロッカーに置いていたスポーツ飲料のペットボトルを手に取り、わずかに底に残っていた最後の一飲みを飲み干すと、着替え室の入り口のドアがガチャリと開いて、奥から誰かが入ってきた。拓志がロッカーの方に体を向けたまま振り向

くと、

「——ええ、どうも、有り難うございました。息子がいつもお世話になってます。ええ、ではこれで。」

奥の誰かと話しながら入ってきたのは、なんと龍雪だった。

「親父、何で……。なんであんたが……」

拓志が驚いた顔で聞くと、龍雪は嗤った。

「おまえ、これ忘れていっただろ」

龍雪はいつも冴が拓志のために作っている弁当を拓志の前に突きだす。

拓志は着替えをしながらロッカーに向いて、そして龍雪は壁に寄りかかりながら、二人は話した。

「あん時は悪かった、いきなり殴ったりなんかして。」

拓志が謝る。

「いや、いいよ、おまえにもいろいろ悩むことがあるんだろ。気にしてないから心配すん……おつと。」

龍雪は慌てて言葉を切ったが、拓志はそのまま着替えを続けていた。龍雪はふうと息を吐く。

そしてしばしの無言の後、こんどは拓志が着替えの手を止めると父親の方を振り返って聞いた。

「なあ、親父。夏日が前言つてたかあさんが昔東京にいたって話、それってほんとなのか？」

「ああ。でもなんでそんなこと聞くんだ？」龍雪は壁によりかかったまま足を組み替えて拓志の方を見る。

「いや、別に……」

龍雪はそう言った拓志の後ろ姿を見ていたが、着

替え室の隅に置かれていた備品の空のヤカンを見やると、言った。

「……かあさんは昔女優を目指してたんだよ。」

「女優？」

あまりに唐突な話に拓志はあつけにとられる。

——高校で演劇部に所属し、主役級も演じた冴は、昔女優を目指して上京した。龍雪はテレビ局で新人のカメラマンをしていて、その関係で二人は出会ったのだ。たまたま同じ故郷だった二人は意気投合して、懇意になった。

「——あんだ！　ちよつとこの荷物持つつといてよ。私あれ買ってくるから。ほら、何やってんの！　早く取りに来なさいよ！」

その頃の冴はとても勝ち気な性格で、押しの強い性格だった。そんな冴ではあつたが二人はうまくやっていた。

しかし滅多に酒を飲まない冴は、ある日酒に酔いつぶれて龍雪の元に帰ってくる。龍雪はその時上着をそつと掛けたその背中の小ささを今でも覚えていた。そしてその日以来、だんだんと、少しずつ、彼女はおつとりとした性格になつていった。また、龍雪が肺に病気を患ったこともあつて、二人は故郷に帰ることにした。

「で、あんたはそのかあさんが酔いつぶれた理由聞いたのか？」

拓志は着替えを終えてバッグのファスナーを閉める。

「いや？ あんまり人の気持ちをはじくつたら悪
いかなと思つて」

引つかかったフアスナーを無理矢理閉めると、拓
志は先ほどの龍雪のようにふうと息を吐いた。

「——だからあんたは詰めが悪りいんだよ。そん
なんじゃいつまでも仕事なんて見つからないぜ」
拓志は着替えを入れたバッグを肩に担ぐと龍雪を
置いたまま着替え室から出る。一人残された龍雪
は息子の出ていったあとの扉を見て、フツと笑つ
た。



そして、ついに拓志が地方を発つ日が来る。

地元のチームの練習から直接東京に渡る拓志は、

新幹線の駅のホームで見送りに来た家族と最後の別れの挨拶を交わしていた。駅には先に拓志がついていて、家族は後から来ていたのだが、しかし、ホームに現れた家族の中に龍雪の姿がない。

「あれ、親父は？」

拓志はきよろきよろ辺りを見回す。しかしやはり龍雪の姿は見えない。すると夏日がいつものように頬をふくらまして言った。

「お父さん、俺はあんな不良息子のことなんかどうでもいいって言って、出かけようとしなないんだ。」

「えっ？」

「出かけるよって呼んだのに、俺は行きたくないなんて言ってさ。まだ兄ちゃんが殴ったこと根に持ってるんだよ。」

拓志は冴の方を見る。しかしその母親は目を横に反らすと、どこことなく微笑んだ。

そして発車を告げるベルが鳴る。

冴は頷くと拓志に「行ってきなさい」と優しく言った。

「ん、じゃあな、かあさん、夏日」

新幹線のドアに入ろうとしたとき拓志が二人の方を振り向くと、ホームと電車の小さな隙間を足元に挟んで、冴と夏日は拓志にちいさく手をふつた。拓志は片笑むと、通路の奥に消える。

そして冴と夏日が見まもる中、新幹線のドアは閉まった。

新幹線は緩やかにホームの縁をすべると、
どんどん速力を増してホームから離れ、
街の向こうの景色の中に消えていった。

——太陽は傾きかけている。

新幹線は窓の外の景色をもものすごい速さで後ろに
吹き飛ばしながら、どんどん故郷を離れていく。
しばらくあごに手をつきブーツと窓の外の黄昏を
眺めていた拓志は、ふと思った。

（俺はあの二人が昔通った道を、今歩いているん
だな。——）

そして腹が小さく鳴ったのに気づいて、弁当が

入っているバツクをあけると、拓志はバツグの一番上に入れていた自分のボールにサインペンで文字が書かれているのに気がついた。そこにはこう書いてある。

「書く場所がないから一言だけ。頑張つてこい。龍雪より」

拓志は一瞬意表を突かれたが、その文字を見ると自分が笑い出すのを止められなかった。

その頃龍雪は、少し外が暗くなつた家のリビングのテーブルで、棚から出した昔のブランデーをゆつくりと傾けていた。ちびりちびりと、かみしめるように飲みながら、フツと笑つてつぶやく。

「あんまり早く帰ってくるんじゃないぞ……」

拓志をのせた新幹線は夕焼けの中を走り続ける。外はどんどん暗くなり、夜に近づいていく。窓の外には薄闇の中、富士山が見えてきていた。東京に着くのも、もうすぐだ。

そして拓志の線路は、まだまだ先へと続いていく――。

■ (2008.12.19)

###

テーマソング：『TOKYO』YUI (STUDIO SEVEN Recordings)

あとがき..

さあて、あとがきです。これまでの小説では長らくあとがきは書いてませんでした。『夏の終わりに』のあとがきを読み返してみたら結構面白かったので、今回は書いてみることにします。

コードネームの「kai」が何かわかる人はこの小説はパクりだと思いかもしれません。そう、BLOOD+のカイですね。夏日の元ネタも宮城リクです。ただ、違うところは違います。例えばカイとリクは母親は既に死んでいていませんでしたが、この小説では冴という母親が出てきます。（ちなみに上村はのだめのオクレール先生の影響

も受けています。」

今回はサッカーも取り上げられる要素の一つですが、私はサッカーのことはわからないので、やはり正確な設定ではないかもしれません。例えば高校生が入るのはもうプロリーグというか、野球で言う一軍みたいなものであつて、ジュニアチームなんて高校生は入らないのかもしれませんが。

今回拓志が乗ったのは新幹線です。私が新幹線に乗ったのはもうずっと前のことでもあり、どっちかというところ飛行機に乗ることの方が多かったので、上京の手段は飛行機にしようかとも思ったのですが、郷愁を誘うのは新幹線かと思つたので、そうしました。それに、最後の「拓志の線路は」の一文も活きますしね。

拓志は龍雪の息子ですが、私は義理の息子と言うことにしようかとも思いました。（夏日の方は間違いなく血のつながった息子です。） そっちの方が拓志が持っているコンプレックスを表現できるとも思いましたし、私の中でのイメージのように冴や龍雪の年齢を若く設定することも出来ると思いました。しかしめんどくさいことになりそうだったので、この設定は明示的には適用していません。

拓志の悩みの原因には龍雪の存在があるわけですが、もし冴のほうももつと歯切れのよい性格だったなら、拓志の悩みもここまで深くなることはなかったかもしれません。つまり冴がああいう性格だから、拓志が悩んでいるフシがあるというわけ

です。

今回は人名設定にとっても悩みました。「たちばな」や、「ひろし」、そして「なつちゃん」と言う呼び名は、どれも実際に私の周りにいる（た）人の名前です。私は小説に使う人名を決めるときはなるべく知り合いの名前は使いたくないし実際避けているのですが、今回はあまりに悩んだのでなかなかいい名前が決められず、仕方なくそのまま選びました。

拓志の「拓」という名前は、中学生の頃に私が一年の抱負の漢字として書道をしたものです。また、最初は夏日ではなく『夏樹』にしようと思つたのですが、拓志以外の家族全員が「き」で終わることになるので、拓志の気持ちを考えて夏日に

しました。「真城」は「真白」でもよかったのですが、山本山といった感じですか。（「城」までが名字です）

冴が酔いつぶれて帰ってきた原因はわかりませんが、たぶん上司や演劇仲間には冴の演劇に対する厳しい意見を言われたからだと思います。大事なのは、その日から急に性格が変わったのではなく、少しずつ内気な性格に変わっていったと言うことです。「誰もが夢を叶えられるわけじゃない」と拓志も言っていますが、冴もその一人だったのでしよう。

立葵（タチアオイ）を使ったのは、その花言葉が『「大きな志」「大望」「野心」「気高く威厳に満ちた美」「高貴」（黄）「率直」「開放的」』

`kotoba.name / より】`を示すからで
す。本来はこの小説の設定では秋の話なので夕チ
アオイの花が咲いている（とかそもそも切り花な
のか？）のはおかしいのですが、この花言葉が昔
の冴のことをピッタリ示していると思っ
て使うことにしました。

拓志の乗った新幹線は、もうすぐ東京に着きま
す。しかしその人生の道のりは、まだまだ先へと
続いているのです。きっとその夜が明けたら、ま
た新しい日々がはじまることでしょう。

■ (2008.12.21)